21

「マギー夫人来日」の記事にみられる高木兼寛の看護婦観

――明治三七年『成医会月報』より――

芳賀佐和子[1]・平尾真智子[1]・蝦名總子[2]

[1]東京慈恵会医科大学医学部看護学科
[2]慈恵看護専門学校

明治三七年四月に日露戦争における負傷者救護のためアメリカより来日したマギー夫人一行は日本で熱烈な歓迎を受けた。日本で最初に看護教育を開始した高木兼寛は、マギー夫人を歓待した側の一員であり、夫人の来日に対して、看護の視点からその意義、考えを述べている。本研究は、マギー夫人の来日を機にみられた高木兼寛の看護婦観を明らかにすることを目的とする。

研究方法として高木兼寛の創設した成医会の会報である『成医会月報』を中心とした史料から、マギー夫人一行来日に関する高木兼寛の看護婦観が表現されている部分に注目し分析を行った。

マギー（Anita Newcomb McGee）夫人はアメリカ人女医でコロンビア大学医学部を卒業し、産婦人科の専門であったが、米西戦争（一八八九）の際に看護婦隊長に任命され、米西戦争看護婦協会を設立し会長に就任した人物である。マギー夫人から日本で救護活動をしたいとう要望が陸軍大臣・日赤社長に伝えられ、許可された。一行九名は明治三七（一九〇四）年四月二二日横浜に入港し、主に広島予備病院で救護活動（六月二日～十月八日）を行い、同年十月二一日長崎港から帰国した。

高木兼寛は明治八年から五年間イギリスのセント・トマス病院医学校に留学し、帰国後の明治一四年、民間の医学団体「成医会」を結成し、医育機関として同年「成医会講習所」を設立した。また明治一五年より、毎月『成医会月報』を発行した。その二六八号（明治三七年六月三十日発行）の成医会記事（二三～二九頁）に、「米国看護婦隊長マッギー夫人一行について述べる

ところがある」、との前置きで話が始まっている。その内容のうち、高木の看護婦観が表現されているものを分析すると次のようになる。

（一）　来日したマッギー夫人の講演内容は人心上、感化力があり、国家にとって益がある。将来日本と英米二国との婦人の交通機関を発達させる。三国は同盟のようなものであるので親密にする必要がある。双方にとって学ぶことがある。来日した看護婦は正則の看護婦学校を卒業した二十五歳以上の者である。

（二）　ドイツの看護婦学校を卒業した英国婦人ミス・ナイチンゲールが、クリミアに出張し傷病者の看護に従事したのが戦時救護活動の歴史上第一である。マッギー夫人の活躍で、米西戦争時の傷病者救護に看護婦が効果があり、米国は世界で初めて軍隊に看護婦を編入した。

（三）　日本で看護婦のことを一般に信ずるようになったのは皆米国人の力である。桜井女学校に看護科を作ったツルス、それより前の慈恵医院、帝大でナイチンゲールを記念した学校の卒業生が養成を行った。看護婦の効能は各府県に吹聴されるようになった。民間での看護婦業は主に米国の人の手によって開かれた。

（四）　看護婦の進歩は、国家の点から非常に利益がある。実際には公衆衛生の先導者となって解剖学、生理学、衛生学、看護学の知識を一般公衆に向けて、健康、病気、病気の予防の観点から日本全国に教えて回っているので、医師より看護婦の方が国民を強壮ならしむ力があると思われる。

マギー夫人と東京慈恵会医院との関係については、看護婦取締の小倉竹代が看護婦人矯風会で英語で歓迎のスピーチを行ったこと（『婦女新聞』二一〇号）、この会には高木が日赤の接待委員、矯風会の名誉賛成員の立場で参加している。またマギー夫人を囲んでの写真（明治三七年）が残っていることがあげられる。